

シルクロードとブックロード

王 勇

国文学研究資料館

本日この会場に集まってこられた方々には、「シルクロード」のことなら大よそ知っておられると思いますが、「ブックロード」とは何かと首をかしげる方が、おそらく少なくはないでしょう。それもそのはず、この耳新しい用語は「書籍の道」を意味する外来語 (Book Road) で、生まれて数年しか経っていない赤ちゃんみたいなものです。これから一人前に成長していくためには、皆様のご加護も必要だろうと思ひまして、ここで名付け親として、愛情をこめてアピールさせていただきます。

ブックロードは、もとよりシルクロードを意識して創った造語ですから、まずはシルクロードを切り口にして、話を進めてゆきたいと思ひます。

一 東西のシルクロード

地域間の文化交流を考えますと、どんなものが、どんな経路で、誰によって運ばれたか、そして運ばれたものが異文化にどんな影響を与えたか、というようなことがまず問題となってきます。

中国と西側諸国との交流に関しまして、十九世紀前後、ドイツ人のリヒトホーヘン博士は Seidenstrassen (シルクロード) という概念を創りだして論じておられたことがとても有名です。シルクロードとは文字通り「絹の道」です。しかも、それは、貿易品としての絹が中国から西の方へ運ばれるという意味で使われるわけですが、近年では中国と日本の交通路も「シルクロード」で呼ばれることが多くなってきているようです。「奈良はシルクロードの終着駅」というのは奈良市の町興しのうたい文句ですし、中国では「海のシルクロード」といって、西につながる「砂漠のシルクロード」と区別して、南と東の諸国との交流をこう呼んでいる人も少なくはありません。

しかし、同じシルクロードといっても、中国と西側の「シルクロード」、中国と東側の「シルクロード」、たとえば日本との「シルクロード」、それらは本質的に異なったものと私は考えます。わかりやすくいえば、中国と西側諸国との「シルクロード」は「絹の製品」を中国から運んでいくわけですが、中国と日本の場合は「絹の製品」よりも「養蚕術」ですね。

紀元前後に東西間のシルクロードが開かれて以来、約六世紀の長きにおよんで、ヨーロッパ人はシルクの製品を愛用しながら養蚕のことをまったく知らなかったのです。古代ギリシ

アと古代ローマの文献、それも中国語に訳された『ギリシャ・ラテン作家による遠東古文献の輯録』（中華書局1987年6月版）を調べますと、シルクは東方の「羊毛樹」から取れるという伝説がありました。つまり、中国人がこの羊毛樹に水をかけて、葉っぱに生えている羊毛を流して集めると信じられていました。やや遅れて、シルクとは蜘蛛のような昆虫がキビとアシを五年間食べつづけ、パンクしたお腹からあふれ出るものとも伝えられていました。このように、ヨーロッパ人は養蚕のことを知らなかったので、シルクを消費しても、それを生産することができませんでした。一方、日本では、かの有名な『魏志倭人伝』によりますと、三世紀ころの倭人はすでに養蚕のことを知り、じっさいに絹物を作り、その製品を貢物として中国の魏王朝へ輸出もしていたのです。

以上のように、ひとくちにシルクロードと言っても、東西には大きな相違がみられるわけですね。したがって、中国と日本の文化交流を考えると、安易に西洋人が中国と西域をむすぶ交易路を表現するために創りだした「シルクロード」という概念を無批判に取り入れてよいかどうか、わたしはとても疑問に思います。少なくとも、その概念を西域以外の地域間交流に導入する場合は、極力慎重さを必要とするべきでしょう。

シルクは中国に起源して、西側にも東側にも伝わったのですが、これに対して、日本をふくむ東側諸国に伝わって、西側諸国には殆ど伝わらなかったものが一つあります。それは、ほかならぬ漢文の書籍です。先ほど、中国と日本の文化交流をシルクロードの概念でとらえることに疑問を表しました。「シルクロードの終着駅」と称される奈良の正倉院をご覧になればお分かりになるかと思いますが、その世界に誇るべきコレクションがガラス・漆器・香木・金具・調度品・仏具などバラエティに富んでいて、シルク製品はごく一部にすぎず、文化財として目をひくのはむしろ膨大な書籍や文書のたぐいでしょう。

それらは、シルクロードの西側からイメージする情景とは、明らかに異なっているわけです。中国と日本をむすぶ通路が、西洋でいうシルクロードとは異なる景観を呈し、「交易」以上の深い含蓄を内包しているということに思い至り、数年前からシルクロードを意識しながら、「ブックロード」という新しい概念を提唱してまいりました。まだ未熟な構想にすぎませんが、その主旨を簡単に紹介させていただきます。

二 間接ロードの開通

「ブックロード」は、おそらく漢の武帝が紀元前108年に衛氏朝鮮を滅ぼし、その地に楽浪郡・真番郡・臨屯郡・玄菟郡を設置してまもなく、中国と朝鮮半島の間に開かれたと考えられます。それがさらに東へと伸びていきますが、日本列島に到達する時期については、応神朝に『千字文』と『論語』をもたらした王仁の伝承をはじめ、五世紀末ごろから六世紀初めにかけて、百済人が書籍を日本に持ってくる記事は、記紀などに多く拾われます。

ここで注意しておかなければならないのは、百済は中国の南朝、とくに南朝の梁と陳から文化を受けとっているという事実です。二十四史にふくまれる『梁書』や『陳書』などを調べてみますと、百済側が中国の南方に都をおいた諸王朝に書物を求める記事は、いくつか見

られます。たとえば、百済が用いている暦は『元嘉暦』というもので、それも南朝系なんですね。そうしますと、これらの書物がさらに百済から日本へ運ばれることとなりますと、中国の南方から百済を経由して日本に至るというブックロードが成り立ち、この書籍の道はだいたい五世紀末ごろ、もしくは六世紀の初めに開通されていたと考えられるのです。

このように海上の航路を通じて運ばれる書物は、後ほど詳しく触れますが、シルクとはまったく異質なものです。まず言えるのは、書物に商品価値がないということです。つまり、書物を越境させる原動力は商業的な利欲ではないということです。書物が商品価値を持つようになったのは、皇學館大學学長の大庭脩教授がその著『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学出版部）において詳細に論じておられた江戸時代に入ってからのことです。それより以前、書物は商品としてより、むしろ書物に付加している、書物が担っている文化そのものが求められるわけです。この意味で、書物の価値は金銭では計られず、書物の流通も「交易」の範疇に納めきれないことは明らかです。

日本に仏教と儒教が伝わったのは古墳時代後期から飛鳥時代にかけての時期ですが、それらの伝播にも書物をもっとも中心的な役割を果たしていたと思われます。中国の『隋書』（倭国伝）を見ればわかるように、文字を知らなかった日本が百済から仏教を得て、はじめて文字を知ったとあります。「文字」とありますのは、今ではただ「漢字」と解釈されますが、当時では個々の漢字より文字の意味的集合体である書籍、または書籍が担っている「文明」の意味合いも多少なりとも含まれているでしょう。

以上述べてきたことをまとめますと、百済を介して、中国南朝と日本列島との間に、五、六世紀ころに日本文化の黎明期に大陸文化を受け入れる「海上ブックロード」が開かれたこととなります。ところが、遣隋使と遣唐使の時代になりますと、ブックロードはいろいろな面で様変わりしはじめます。

三 直接ロードの開通

まず指摘したいのは、遣隋使によって百済経由の間接ルートが日本と大陸をむすぶ直接ルートに取って替わられたことです。遣隋使の派遣目的につきまして、平安時代の成立と推定される『経籍後伝記』という書物に、「このときに、国家に書籍が未だに多からず。ここに小野臣因高を隋国に遣わし、書籍を買い求めしめ、兼ねて隋天子を聘う」と、はっきり書いてあります。聖徳太子が小野妹子を隋に派遣したのは、書物の買い求めにあるというわけですが、このことは中国の『宋史』（日本伝）では『法華経』を求む」と具体化しています。私事ながら恐縮ですが、わたしが日本の総合研究大学院大学に提出した博士論文は「聖徳太子と中国文化」で、一応は聖徳太子を専門としておりますが、聖徳太子の「三経義疏」の著述と遣隋使の書籍輸入との間に、密接な内在的関連があったように思います。

遣隋使の派遣目的につきまして、従来は朝鮮半島の情勢と絡んで外交と軍事の側面が強調され、または内政改革の必要から政治的な目的が主だったとの意見もあり、さらに文化あるいは仏教の輸入こそ狙いだと言主張する方もおられます。しかし、考えてみれば、政治・経済・

外交・宗教・文化など、われわれは今こそ細かく区分していますが、古代に遡れば遡るほど、それらは一体化しているはずですね。文化イコール宗教、宗教イコール政治、政治イコール外交、それぞれが密接につながっていると思います。この意味では、遣隋使はその目的を細分化しますと、政治的・外交的・宗教的な狙いがあったとしても、全体としては進んだ大陸文化を迅速かつ直接に中国から取りいれようとしていることは言えるでしょう。

そこで、次の問題として、遣隋使またはその後を受けついで遣唐使の採った文化輸入の方法を考えてみましょう。中国と日本との間に浩瀚な大海が横たわっており、人間の往来と物資の流通が簡単にはできない過酷な自然的状況にあります。そんな状況に置かれて、中国の文化を受けいれるもっとも効率的な方法といえば、ほかならぬ書物でしょうね。とりあえず中国から書物を持ち帰って、それからじっくり読んで中味を理解していくという方法です。最澄などは短期間の滞在ですけれども、たくさんの書物を持ち帰りました。これらの書物は一年間という滞在期間中に、内容のすべてを解読できるはずはありません。数十年、数百年かけて解読するものもあれば、遣唐使らが持ち帰ったものを千年あまり経った今のわれわれがなお読みつづけているものもあります。一冊のすぐれた書物はあたかも文明の種子のごとく、一人の入唐僧あるいは一人の渡来人よりも、持続的かつ広範に多くの人々に文明を伝え、それを開花させるものです。

遣唐使の書籍将来に関しましては、中日双方の文献にたくさんの実例が記録されています。たとえば、白雉五年（654）に帰国した遣唐大使の吉士長丹は、多くの「文書宝物」を持ち帰った功績によって、孝徳天皇から褒美されているわけです。『日本書紀』で「宝物」の前に特筆された「文書」とは、書物の意味です。また『旧唐書』（日本伝）には、こういう面白い例もあります。日本の遣唐使は、唐の皇帝から貢物に対して与えられた賜品、おそらくシルクや陶磁器のたぐいでしょうが、それらの宝物をすべて換金して書物を買って帰ったという記事です。

かりにですが、もし西側からの遣唐使、たとえばローマ使やペルシア使が同時に入唐して、唐の皇帝から書籍をたっぷり賜わったとします。おそらくシルクを賜わった日本使と、双方とも気持ちよく交換してしまうでしょう。日本人にとってシルクも欲しがらる贅沢な高級品ですが、それ以上に書籍の持つ文化的価値に目を惹かれます。それに対して、西側の遣唐使は、貴重な書物を与えられたとしても、それを生かす文化的な土壌がなければ、商品としてほとんど一文にもなりはしません。ここに、西側の遣唐使と東側の遣唐使の価値観の相違が鮮明に見てとれ、またシルクロードとブクロードの根本的な相違も表されているように思われます。

四 漢文書籍の環流

このように、遣隋使や遣唐使によって開かれたブクロードは、間接ルートから直接ルートへの切り替えだけでなく、中国の北方と日本の奈良または平安をむすびつけたという点にも、大きな意味があります。日本の風土にあう南方的な生活文化、たとえば呉音、伎楽、曲

水などがしだいに息をひそめ、強大な中央集権をささえる北方的な制度文化、たとえば都市、法律、官制などが長安から日本へ押し寄せてきました。南方文化は春雨のように音も立てずに日本の土壌にしみこんだとすれば、北方文化は集中豪雨のごとく雷や稲妻を伴って日本の大地を洗ったと言えましょうか。

それはともかくとして、遣唐使の開拓したブックロードは、日本文化の性質を確実に変えていくこととなります。こう申しあげますと、ブックロードはあたかも中国から日本へと一方的に通行しているように思われがちですが、事実はそれではありません。書物はシルクと違ってほとんど贈与されますが、日本はそれを無料同然にもらっては、お返しもしなければなりません。

この点、昔の日本人はきちっとお返しをしていて、まことに尊敬に値します。その一つは遣唐使時代から、日本もわずかながら自分の書物を中国に輸出している事実です。文献資料によりますと、遣唐使や入唐僧のことはよく「虚往実帰」つまり空っぽの船で渡り、宝物を満載して帰ると評価されます。いまや日本語の曖昧表現は世界的に名高いものですが、昔の日本人も同じ、かれらの言葉をそのまま受け取られてはたまりません。

遣唐使の船は空舟ではなく、入唐僧も手ぶらで海を渡ったわけではありません。書物を求める日本人は、日本の書物を中国へ持っていったのです。たとえば、聖徳太子が、遣隋使らが持ち帰った書物を参考にしてつくった『三経義疏』（『法華義疏』、『維摩経義疏』、『勝鬘経義疏』を指す）は、平安初期つまり唐の開成三年（838）円載によって天台山、それより約六十年前（772）戒明らによって揚州にもたらされました。そのほか、淡海三船の『大乘起信論注』、石上宅嗣の『三蔵賛頌』、最澄の『顕戒論』なども中国に伝えられました。

日本人のお返しとして、次にあげられるのは、いわゆる佚存書のことです。中国では、唐末の乱世を経て、書籍散逸の惨状に目を覆うものがありました。つづいて五代になりますと、天台僧の義寂が宗門の復興をはかり、苦心して書物を捜し求めましたが、得るところは『浄名疏』一点のみでした。そこで、呉越王の銭弘俶は使者を海外に遣わして、散逸書を求めさせました。その結果、高麗からは諦観、日本からは日延、この二人はそれぞれ自国にあった書籍を中国に送りとどけてきました。

その時、日延の肩書きは「繕写法門度送使」といい、「書籍を送る使者」の意味です。だとすれば、遣唐使のことを「書籍を求める使者」と名づけても良さそうですね。ここで注目していただきたいのは「書籍を送る使者」と「書籍を求める使者」とがまったく同じ通路を利用していたことです。言い換えれば、遣唐使時代に「ブックロード」を通して朝鮮半島や日本に流れこんだ書籍の一部が、五代以降になりますと、同じコースを逆行して戻ってくるようになります。

明治時代になりますと、日本では西洋化のあまり、伝統的な文化は軽く見られるようになり、その時期、多くの中国人は書籍を求めにブックロードを通して来日し、佚書探しのブームを引き起こしたのです。もっとも有名なのは楊守敬という人物で、中国の書物だけでなく、奈良時代の写経など国宝級のものを安い値段で買い取り、中国に持ち帰ったのです。ここ十年前後、今度は日本の有識者はブックロードを通して中国へ行き、佚書探しの旅に足しげく

出かけている模様です。

このように、ブックロードを通して、書物は東アジアを駆け巡ります。まるで人生の旅と同じように、書物は流布しながら、視野をひろげ、閱歴を積み、胤を落として、新天地に子孫を増やしていきます。

『勝鬘經』というお経を例にとえましょう。このお経はインドから伝わり、中国で翻訳されて、各地に広がります。それを読んだ中国の僧侶は各々の見解を入れていくつかの注釈書をつくります。そして、それらの注釈書は朝鮮半島に輸出され、朝鮮の僧侶は自分の理解で新しい注釈をつけ加えます。中国と朝鮮の注釈書がさらに日本へ伝わり、聖徳太子は『勝鬘經義疏』をつくり、それを中国に逆輸出します。中国の明空という僧侶はこれに啓発を受け、『勝鬘經疏義私鈔』を著わします。入唐僧の円仁はこれを書写して日本に送ります。この本は中国では早く散逸してしまいましたので、今から八年前、わたしは西教寺で古い写本をみつけ、博士論文を書いたという紆余曲折は、書物の旅はたんなる空間の移動ではなく、観光のツアーでもなく、みずからを再生する旅であり、新しい文化を創造する旅でもあるということをお話してくれたのではないのでしょうか。

五 模倣と独創

以上はシルクロードとブックロードについて紹介させていただきました。長くなりましたが、最後にブックロードによる文明創造のメカニズムについて考えてみたいと思います。

シルクに代表されるものが「物質文明」と言えるならば、書籍に象徴される文明は「精神文明」と定義したいです。両者はどう違うかといいますと、物質は消耗されて文明を生産しませんが、精神文明はみずからを再生する機能をちゃんと持っているという点です。中国と西域との交流、つまり使節の派遣は中日間よりずっと頻繁でした。日本の遣唐使は、約二六〇年の間に一番多く計算しても二十回しか任命されませんでした。しかも実際に中国に到着したのは、十六回か十五回とさらに少なくなります。平均すれば、およそ十七年に一回という低い頻度です。

一方、アラビアやペルシアの使節は年に数回という頻度で中国に来ている記録があります。日本とは比べ物にならないほど中国と濃密な遣使関係を持っていたわけで、その割にたくさん中国製品が西側へ運ばれていきます。ところが、日本と比べて不思議に思うのは、このような高濃度な人的・物的な交渉があったにもかかわらず、西側諸国は中国と同じような文化を創りあげなかったことです。文明景観はまったく違うとっていいほど異質なものでした。物を受けいれても文化は融合しないとしか説明できません。

日本の場合はどうでしょう。われわれは日本各地の寺院建築や正倉院宝物などを目にしますと、妙に懐かしさが込みあがってきます。異国でこれまでなじんできた風景に接する安堵感、あるいは祖国で失われたものを日本で発見する望外の喜びを実感できます。そうしますと、古代の人々が渡りがたい荒海に隔てられながら、どうして彼岸の日本に祖国そっくりの文化が創られたのか、しばしば考えさせられます。日本文化は模倣文化だという既成の答え

は、すでに用意されていますが、どうもそれでも釈然としないものがわたしの胸中にあります。

日本文化は明治維新を境目にして、それ以前は中国文化の焼き増し、それ以後は西洋の猿真似だというのは、ほぼ定説化している感があります。まあ、そういう面もないとは言えませんが、それでは模倣以外に日本人が何をしたかという厳しい追及が来ますと、さすが返答に困ってしまうでしょう。模倣文化論には日本民族の主体性を無視する欠陥があるわけですね。

一方それに反発して、やや国粹主義的になってしまう人々は、今度は何でも日本の独創だと言い張るのです。平城京と長安城とを比較して、わずかな相違をみつけますと、「ほら独創都市だ」といってはしゃぐ方が、今だいぶ氣勢をあげているようですね。周辺文化とのつながりを切り離し、日本文化を孤立させてその独自性を強調する傾向と、日本民族の主体性を無視し、その文化を中国文化あるいは西洋文化の一部としか評価しない傾向、この二つの傾向はともに行き過ぎ、または一種の偏見だと、わたしは感じます。

純粋な独創文化はこの世に存在しないのと同じように、純粋な模倣文化もレプリカに過ぎず「文化」として機能しません。文化は多くの場合、模倣と創意を交えながら創られるものだと信じます。あるときには模倣の度合いが大きく、あるときには創意の要素が多いという差はありますけれど。それでは、この前提を念頭におきながら、日本文化の生成メカニズムに迫ってみましょう。

まずは選択の問題です。日本の古代文明、仏教や儒教をはじめ、都城にしろ、制度にしろ、服装にしろ、絵画にしろ、年中行事にしろ、いずれも中国的な影響を濃厚に受けている事実を誰しも否定はしないでしょう。しかし、日本人の体質に合わないものは取り入れても役に立ちません。ときには危険を伴います。たとえば、中国の「三大奇習」つまり科挙、宦官、纏足が日本に入らなかったと言われます。また道教も神道がそれと似たり寄つたりの役割を果たしているから、日本の皇室から拒否されていました。書物の例ですと、中日を行き来する船がもし『孟子』を積めば、必ず転覆するという伝説さえあります。「易姓革命」を唱える『孟子』思想は、「万世一系」を標榜する天皇系の体質に合わないから、それも拒まれてきました。

次に変容の問題です。明治初期、怒涛のように日本に入った西洋文物、たとえば背広、サイズを縮小しないと、背丈の低い日本人の体がすっぽり入っていたら、なんという格好になるのでしょうか。みっともないですね。だから、古代から日本人は外国のものをいかに自分の体質に合わせるか苦心してきました。平城京はおよそ長安の四分の一に縮め、律令の刑罰はいくらか軽くし、漢方薬は分量を少なめにするなど工夫を凝らし、智恵を絞るわけです。

最後に模倣と独創に決着をつけたいと思います。紙が発明されて以来、人類はみずから蓄積してきた文化伝統を口承よりも、主として書物に託して後世に伝授するようになりました。漢文の書籍は前述のように東アジア諸国にもたらされ、中国人も日本人も朝鮮人も同じ書物を読み、そこから感化を受け、世界観・美意識・哲学思想・思考様式・社会道徳・生活習慣といった共通的な心象風景が精神世界に根付きます。これらの心象風景を具現した文化創造の営為は、結果として類似した趣向のものを生み出してしまうのです。

しかし、角度を変えてみれば、日本人は自分の心情を吐露するために漢詩を詠み、日本人

の病気を治すために漢方薬を改良し、日本国を建設するために律令を編纂するわけで、唐人のために平城京や平安京をつくったのでも、また中国語を書き写すためにカタカナや平仮名を発明したのでもありません。形が唐風であっても、心は和風ですね。形だけが日本文化ではなく、心だけでも日本文化は成り立ちません。形と心とが刺激しあい、融合していくところに、日本文化の活力、日本文化の本質なるものがわたしに見えてきます。

このような効率の高い、親近感の持たれる、生き生きとした文化生成の様相は、シルクロードにはみられず、ブックロードの賜物といわなければ、なんと言うべきでしょうか。

長時間にわたってご静聴いただき、まことにありがとうございました。